

第39回全国博物館大会参加報告

博物館法制定40周年記念大会に参加して

平成3年12月9日から2日間、第39回全国博物館大会が大会テーマ「新しい世紀をめざす博物館」のもと、国立教育会館虎ノ門ホール及び東京国立博物館を会場として開催された。

特に本年は、昭和26年に博物館法が制定されて40周年にあたる年でもあり、天皇・皇后両陛下をお迎えして、大会のまえに博物館法制定40周年記念式典が挙行された。お言葉の中で、これを契機に博物館が、国民の多様な要請に的確に対応しつつ、幅広い年齢層の利用者に親しまれる施設として発展するとともに、博物館が互いに協力することを願うという表現で、今後の博物館の在り方について示唆されたことが印象的であった。

107名の顕彰及び棚橋賞と支部表彰があり、東海支部代表として受賞する栄に浴した。

さて大会は、第一日目のシンポジウムと第二日目のフォーラムを中心に展開された。シンポジウムは5名の講師がそれぞれの立場から問題点を提示し、翌日のフォーラムにつなぐ形式で行われた。各講師の発言の要旨を次に述べる。

林屋晴三氏： 今後は研究も重要であるが、サービス事業であるという基本的姿勢が大切、学芸員は広い視野と見識が必要、独善はだめ。
小倉忠夫氏： ボーダレスの時代にふさわしく柔軟性と総合性が必要。

村井 勇氏： 多極化への対応が必要、新技術の活用も大切。

白根礼吉氏： 高齢化への対応が必要、方法を考えよ。ハイテクの導入も大切。

吉田啓正氏： サービス精神に徹している。情報化、国際化に対応出来ること。

その他司会の坪井清足氏をふくめ、二極化の問題、日本型の博物館学の早期確立の問題等が提起された。

第二日のフォーラムは、坪井清足氏と青木国

夫氏の司会のもと活発に展開された。しかし、それぞれの館の規模、職員構成や設置者の相違から対立する意見も多くみられた。学芸員の身分の問題や資格の問題のほか、専門職員と事務職員の問題等に終始したきらいがあった。その他、情報化社会にいかに対応するか等の問題も討議された。最後に今大会の決議文を紹介する。

第39回全国博物館大会決議

第39回全国博物館大会において、21世紀に向けての生涯学習時代に即応する博物館の振興に関し、十分検討した結果、次の事項について決議する。

記

1. 我が国博物館は、生涯学習の促進のため、他の文化施設及び教育機関と密接な連携を図り、特色ある積極的な活動を展開する。
2. 博物館法制定40周年を記念し諸活動を積極的に行うため、次の各項を国及び関係機関に対して要望する。
 - (1) 博物館法の改正
 - (2) 学芸員の資質向上と処遇の改善
 - (3) 特別事業に関する予算の継続年度の拡大
 - (4) 税制
 - ・特定公益増進法人の認定の拡大
 - ・指定寄付の適用緩和
 - ・博物館の事業に必要な資料の購入・受贈に関する譲渡所得税の減税
 - (5) 助成
 - ・生涯学習を積極的に推進するために博物館が行う収集・保管・調査・研究・展示・普及等に対する補助・助成の増額と新設
 - ・科学技術の発達による新しい博物館活動の整備に対応する助成
 - ・私立博物館の振興のために公立博物館と同様の補助・助成

(岐阜県博物館館長 篠田 幸男)

農林業体験研修施設

野麦峠の館

〒509-34 大野郡高根村野麦
TEL 057759-2820

全国的に名が知られる野麦峠は、奈良朝時代には既に飛騨と信州を結ぶ交通の要所でありました。明治から昭和の初期にかけては、生糸貿易の全盛期であり、それに伴い峠を越す女工たちの往来も盛んになってきました。戦後になると、鉄道・国道（主要県道）の開通、整備等により、野麦峠の役割は薄れていきました。しかし、野麦峠までの道路の全線開通に加えて、小説『あゝ野麦峠』（著：山本茂美）やその映画化等により、再び脚光を浴びることとなり、現在、年間の観光客が20万人を越す、当村一の観光資源となっています。

その野麦峠に新たな観光の名所として、昨年7月「野麦峠の館」がオープンしました。野麦峠の頂上（標高1672m）に建てられた、日本一高い場所の資料館です。

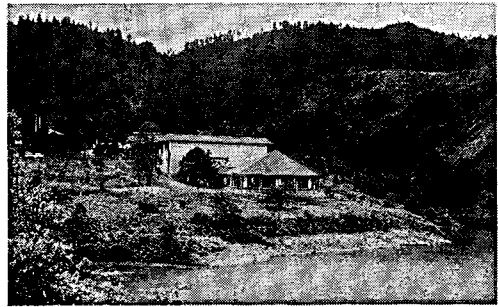
資料館の中は主に7つのエリアで構成され、入館されたお客様には、館内の様子が一目で分かるような電光標示板が設置されています。

それでは、7つのエリアを簡単に紹介すると、館の入口から「いろはエリア」が広がり、フロアに女工たちが歩いた野麦街道を示した地図が描かれ、壁には峠の語源等を分かりやすく説明しています。

「わくわくエリア」では、大型スクリーンに三台の映写機による、高根村の四季と自然を迫力ある映像で写し出し、音響でさらに効果を高めています。

「かたりべエリア」では、工女の悲しくもたくましい表情を描いた絵画（作：沖野清）及び、昔の^{そま}杣仕事、蚕飼いの道具等を展示しています。

「なるほどエリア」では、全国の都道府県を代表する峠を集め、テレビ画面によりその峠の



名前のいわれや歴史的背景、果して来た役割等を知ることができ、さらに専用コインの投入により峠のデータもプリントできます。

「ほのぼのエリア」では、峠の移り変わりを三面転回の大形テレビジョンにより説明したり、六台のテレビ画面で、野麦峠の自然の美しさを上空や地上から写し出し紹介します。

「ばいばいエリア」では、この地域の特産品等を展示しています。

「イベントホール」では、一般から募集した作品の展示や、催し等を展開しております。

これらのエリアは、すべて若者からお年寄りの方々まで楽しむ事ができ、峠の本来の姿、果たしてきた役割をわたしたち現代人に語ってくれます。またそれによりわたしたちも遙かいにしえ、女工たちの時代に想いをはせていくことができる、全国的に珍しい館となっています。

「野麦峠の館」は、名峰乗鞍と県立自然公園の豊かな自然に抱かれた資料館です。

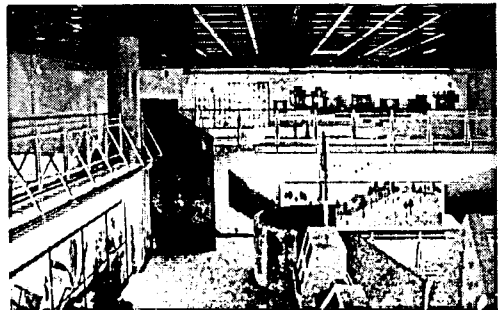
〔開館時間〕 午前9時～午後4時

〔入館料〕 大人400円 中・高生300円
小学生200円

〔休館日〕 毎年11月中旬～4月30日迄

〔駐車場〕 乗用車50台収容

（高根村役場農林課）



白川郷

どぶろく祭の館

〒501-56 大野郡白川村荻町559

TEL 05769-6-1655

「日本の心を美しく伝えるふるさとの祭り」
「神と自然と人とが会おう祭り」= 白川郷どぶろく祭り =

周りの山々が紅や黄金色に染めあげられる10月、村は収穫の喜びを迎えます。収穫が終るころ、合掌造りの屋並をぬって、神輿を中心に、獅子舞いや鬨鶏楽・五色の吹き流しや幟を連らねた行列が、笛や太鼓の音を響かせながら練り歩きます。

祭りのクライマックスは、何といても「どぶろく」の行列が境内に帰ってくると、神に供えられたどぶろくが参拝者や見物客にふるまわれます。どぶろく奉納のあと、獅子舞や、民謡芝居などが演じられます。中でも17種類もある獅子舞が1度に披露されるのは、1年間でどぶろく祭りのときだけとあって、観光客だけではなく、村の人たちにも人気があります。神・自然・人が一体となり、ふるさとの素朴な心を美しく詠いあげた神事です。

「どぶろく祭の館」は和銅年間に勧請と伝えられる、白川八幡神社に伝承されるどぶろく祭及び歴史資料、伝統芸能等を保存、紹介し、後世に伝えんと建設したものです。

建物1階はどぶろく祭の一部分を再現しています。獅子舞をはじめ太鼓方、笛方等人形や模型を使って祭り当日の情景を表現しています。祭りに関する資料や貴重な遺物も多く展示しています。建物2階には八幡神社の社宝を展示し（神像、燈籠など）、どぶろく酒醸造の器具と祭具のコーナーを設け、それぞれの歴史を

説明しています。

映写室ではどぶろく祭の全容を視聴することができます。希望により神酒（どぶろく酒）をふるまっています。

入館料 16歳以上 310円（260）

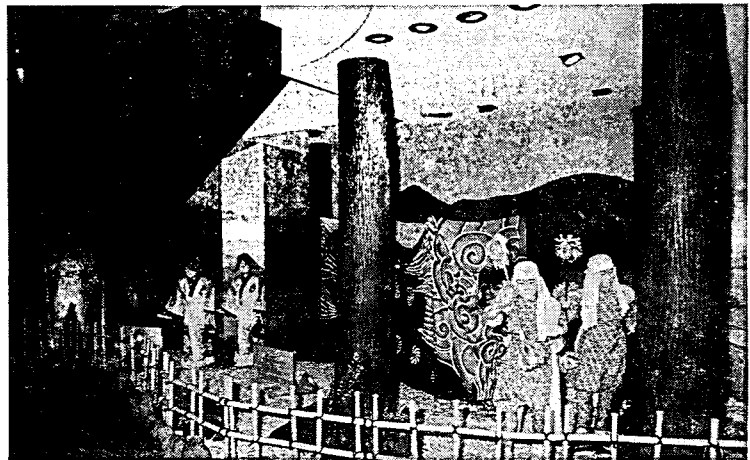
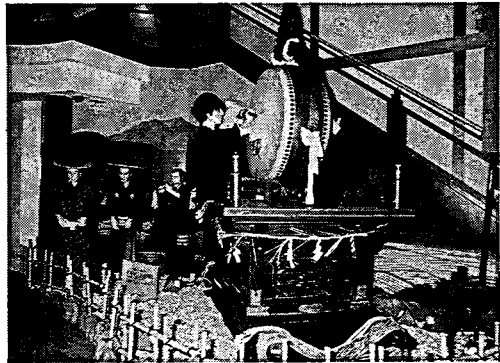
6歳以上16歳未満100円（80）

（ ）内は25名以上の団体

白川八幡神社どぶろく祭

毎年10月14日・15日

（鈴口 茂）



飛驒河合いなか工芸館

〒509-43 吉城郡河合村大字角川223-1

TEL 0577-65-2912

「みどりと白銀、飛驒かわいむらんど」

これを、村づくりの基本理念として掲げ、全村民が一丸となって「住む人やすらぎ、来る人憩う飛驒かわい」をめざしています。

河合村は、岐阜県の北端に位置し、村土の95%を山林で占め、急峻な山々に囲まれた峡谷型の典型的な山村です。

さて、どんな山村にも、その地域が育んだ産業があるものですが、飛驒山中（さんちゅう）河合村には、平安時代の昔から今にその製法が伝わる「山中和紙」があります。

最盛期（明治30年頃）には、100戸余りが手漉和紙の生産をしていたが、時代のすう勢と共に減少し、現在では5戸が生産しているのみとなり、このままでは折角の伝統産業が衰退する瀬戸際まで追いつめられました。

この危機感から、地場産業の振興と伝統技術の伝承、後継者育成を目的に、和紙の生産、実演、実習をはじめ、高齢者の生きがい対策として和紙の加工やワラ細工、また、草木染、ハタ織の実習、民芸品やガラス彫刻の展示即売ができる施設として、昨年5月にオープンしました。

工芸館の内容をもう少し詳しくご紹介いたします。

建物は三階建てで、一階は和紙の原料処理を主とした作業室と村民ならだれでも利用できる創作室、二階は和紙の生産と実習や研修会ができる部屋があり、草木染実習専用の部屋も完備しています。

三階は展示即売ができる多目的スペースと和



室がそれぞれ設けてあります。

この施設の特徴は、純^{こうぞ}楮を用いた伝統ある和紙の生産を行ないつつ生産を公開していること、入館者も希望すれば「手すき」を体験できる設備が整っていることです。

また、平成4年度は、工芸館を中心としたいろいろな催しが計画され、なかでも、5月3日～5日に草木染をメインとした展示会、秋から冬にかけて和紙塾を2回（1回5日間コース）開催する計画があり、積極的な施設活用策が講じられ、各方面から注目されています。

工芸館の建設によって、草木染や民芸品研究グループの活動も活発になり、名実共に「いなか工芸館」の本領を発揮してくれる施設となるでしょう。

- ・開館時間 午前8時～午後5時
- ・入館料 無料
- ・休館日 毎週水曜日
- ・和紙手すき実習料 1回500円
- ・駐車場 大型バス 2台
小型車 15台

（河合村企画商観課）

『博物館とハイビジョン』

と き 平成4年1月28日

ところ 岐阜県美術館

講 師 NHKエンジニアリングサービス

技術開発室部長 寒川 幸一氏

岐阜県美術館学芸課長 平光 明彦氏

本年度第4回公開講座を、岐阜県美術館のご協力を得て開催した。

今回は、最近注目を集めているハイビジョンの概要と応用について研修し、今後の博物館活動に生かそうという趣旨のもとに計画、実施した。まず最初に寒川先生から、ハイビジョンのメカニズムを中心に、続いて平光先生からその応用例として、岐阜県美術館のハイビジョン静止画についての取り組みと実際の活用状況について講演をいただいた。

講演会の終了後、同館で開催中の「世界現代ガラス展」、常設展等を鑑賞し、好評のうちに4時30分終了した。

★寒川先生の講演内容から

ハイビジョンの研究は、情報メディアの中心が依然として新聞、ラジオにあるころ、次世代のテレビがどうあるべきかという視点から昭和39年に始まった。大画面での映画が、あたかも自分がその場にいるような臨場感から、人間の感情を揺さぶり深い感動を与えること。テレビでもそうした機能を持たせるにはどうしたらよいか。人間の視覚心理の研究等を通して得た結論から、映画に匹敵する効果が得られる画面

は、現行のテレビの縦：横の比が3：4であるのに対して最小限で9：16であること。

また、現行の画面が525本の走査線で40万画素であることから、画面が大きくなれば映像がぼやけてくること。それを解消し鮮明な画像とするには、走査線を最低1125本、200万画素とし、音響効果を高めることによって期待される成果が得られること等、20年余の研究を通してようやく完成の域に達することができた。最近では、昭和60年、筑波での国際科学博覧会場で、400インチの大画面を通して見る人に大変深い感動を与えることができた。

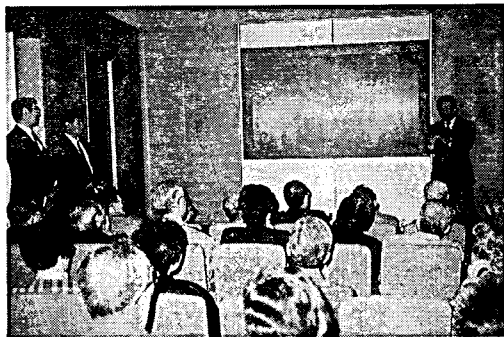
ハイビジョンは電子信号で送受信されることから、マルチメディアとして活用できる。その例として印刷物や映画への応用がある。映画では撮影にフィルムを使用するが、撮影した結果を見るには一旦現像する必要がある。ハイビジョンでは録画、再生が簡単であることから、最近では劇場用映画の撮影に利用されている。その他国際会議、結婚式等に使用し、効果をあげている例もある。その応用は幅広いものがあるので、今後はさらに各方面で活用されるものと考えている。

★平光先生の講演内容から

岐阜県美術館では、ハイビジョンとは何かという基本的なところから出発した。その後ハイビジョンで何をやりたいかを明確にし、館側と制作者側とが一体となってシステムの構築にあたり現在の体制ができた。

岐阜県美術館のハイビジョンは、館蔵の作品についての情報をデータベース化し、検索によって来館者の求める情報を自由に得てもらうシステムと、館蔵の作品を中心に番組を制作し、鑑賞してもらうシステム（ハイビジョンギャラリーと称する。）の2本立てになっている。

番組は館蔵品に関するもの25本、エルミタージュ美術館に関するもの10本、ハイビジョ



ン推進協議会の制作になるもの20本、この3月にオルセー美術館に関するもの10本が加わって計65本となる予定である。(この後ハイ

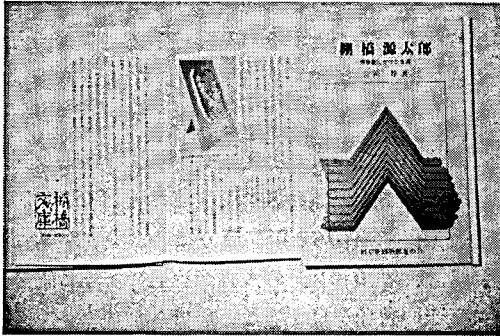
ビジョンギャラリーに移動して、具体的に使用例を見せていただき、説明を受けた。)

(事務局 安藤和男)

県内ニュース

◎ 博物館事業に生涯をかけた

「棚橋源太郎」の伝記出版される



本巣郡北方町出身で、わが国の科学教育、博物館事業の基礎を築いた棚橋源太郎先生(1869～1961)の業績を描いた「棚橋源太郎—博物館にかけた生涯」が出版されました。著者は元岐

阜県博物館自然係長・宮崎惇先生・A5判、262ページ。県下の小中高校733校および県関係機関へ配布されました。

印刷・製本は岐阜ルネッサンスクラブ(代表=飯尾寛・岐阜文芸社社長)が平成3年度事業として行われたものです。

この本についての問い合わせは岐阜県博物館友の会へどうぞ。

◎ 平成4年度岐阜県博物館協会総会案内

平成4年度岐阜県博物館協会役員会及び通常総会を下記のように行います。ご都合をつけてぜひご参加ください。

期日 平成4年5月8日(金)

場所 岐阜県博物館

編集後記

◇岐阜県博物館協会にとって、あわただしい平成3年度でした。6月に開催した東海地区博物館連絡協議会・日本博物館協会東海支部総会と10月に開催した東海三県博物館協会交流研修会には各県から多くの参加者が集まっていたが、2つの大会とも盛況のうちに終わることができました。大会当日の会場準備・受付、取材などの仕事に携わっていただいた皆様や、研修視察コースとして特別に配慮くださった館・園等多くの県内の協会加盟の会員の皆様にあらためて感謝申し上げたいと思います。

県外各地から来ていただいた博物館関係者の励ましやご助言をもとに岐阜県博物館協会並びに協会加盟館・園の新たな発展を期待いたします。

◇3年前機関紙委員会を中心として「岐阜県の博物館ガイドマップ」を作成いたしました。当時100館の加盟がありました但现在では117館に増えました。平成4年4月から2～3館が入

会していただけることになっています。機関紙委員会として平成4年12月の「岐阜の博物館」100号では、全加盟館・園の紹介号とするよう今から企画をしています。

◇各地で個性的な資料館や新しい情報機器等導入された施設が建設・オープンされています。今後も多くの皆様が岐阜県博物館協会へ入会して下さいますようお願いください。

◇平成2年度、平成3年度と2年間の機関紙委員会の任期が今回の号で完了します。取材等大変なご協力ありがとうございました。今後もよろしく願います。

川瀬善忠・中島恬(岐阜県博物館)

野尻佳与子(内藤記念くすり博物館)

横田宏(岐阜市歴史博物館)

齋藤尚子(齋藤美術館)

加藤よね子(岐阜県陶磁資料館)

三島藤男(日下部民芸館)

水口登美子(高山屋台会館)